協会ニュース　西区歴史探訪				
1	2016年(平成28年)	10月号(233号)	田辺謙二	①堺市西区歴史探
2	2016年(平成28年)	12月号(235号)	田辺謙二	②家原寺
3	2017年(平成29年)	2月号(237号)	田辺謙二	③石津川
4	2017年(平成29年)	4月号(239号)	田辺謙二	④日部神社
5	2017年(平成29年)	6月号(241号)	田辺謙二	⑤浜寺公園
6	2017年(平成29年)	8月号(243号)	谷川 正知	⑥大鳥大社
7	2017年(平成29年)	10月号(245号)	田辺謙二	⑦二つの街道
8	2017年(平成29年)	12月号(247号)	谷川 正知	⑧幻の遺跡 四ツ池（上）
9	2018年(平成30年)	2月号(249号)	谷川 正知	⑨幻の遺跡 四ツ池（下）
10	2018年(平成30年)	4月号(251号)	田辺謙二	⑩往古、戎（ｴﾋﾞｽ）神が降臨した石津神社
11	2018年(平成30年)	6月号(253号)	田辺謙二	⑪義経が坐した石の残る踞尾神社
12	2018年(平成30年)	8月号(255号)	田辺謙二	⑫浜寺界隈

堺市西区歴史探訪①

［田辺謙二］

私は堺区の南のはずれ、西区との境界近くに住んでおります。西区には多くの歴史的建造物があり、地元の皆さんに手厚く保護されています。

例えば、日本武尊や大鳥連祖神を祭神とする大鳥大社、蛭子の命（恵比須様）が初めて上陸した石津川河口付近に建つ石津太神社、また、古墳時代に仁徳天皇陵古墳よりも先に築造されたと言われる乳岡古墳、そして、行基菩薩生誕地として知られる家原寺など、堺区以外でまち歩きを楽しみ、そして歴史に浸るには打ってつけのエリアと言えます。

今回は乳岡古墳と石津太神社を紹介致します。乳岡古墳は、古墳時代（４世紀後半）に百舌鳥野の南西部に前方後円墳の形状で築造され、周囲に約 30m 幅の濠を巡らせていました。しかし、その濠は埋設され前方部も削られて、現在は後円部のみ残されています。近接して神石小学校がありますが、かつての悪ガキ曰く、「昔は山の周囲にはフェンスなどなく、一日中、虫取りをして遊んでいたなぁ！」と。昭和 47 年の古墳確認調査で石棺が発見され、埋め戻されています。乳岡古墳は子どもたちの成長をこれからも見守り続けてくれるのではないでしょうか。

石津太神社は、延喜式内社で紀元前 469 年に創建されたと伝えられ、我が国最古の戎（恵比須）社と言われております（写真）。毎年 12 月 14 日には、泉州の奇祭「火渡神事：やっさいほっさい祭」が行われますが、昔、蛭子の命が石津川河口付近に流れ着いた時、漁師たちが薪の火を焚いて暖めて迎えたという伝説にならった祭りです。素足で火のついた薪の上を歩く、なんとも勇壮なお祭りです。拝殿は寛政末年に創建されたものであり、本殿、鳥居とともに堺市の有形文化財に指定されています。しかし、近年老朽化が顕著になったため、昨年より修復工事が行われています。今年の「やっさいほっさい祭」には、竣工した厳かな拝殿を見せて頂きたいものです。

歴史探訪②　家原寺

［田辺 謙二］

「行基菩薩生誕地」として知られる家原寺は、ＪＲ阪和線の津久野駅から南に1kmほど下った家原町にあります。駅からお寺に至る泉北2号線の途中には1年前に新設された堺市立総合医療センターがあり、堺市民の健康・安心の拠り所になっています。

さて、家原寺縁起書によりますと、家原寺は今から千三百年前に行基が生まれた所として行基自らが命名したとされています。「家」は行基自身の生家を、「原」は生母のお腹を指していると言われています。行基の広範な業績の数々は、とてもこの紹介文に書ききれるものではありません。狭山池などの灌漑用の池や数々の橋、深井にある大野寺や土塔といった多くの寺院、また診療所のはしりとも言える民衆のための施薬院など、超人的な働きをした社会事業家行基の活動のいくつかを、私達は堺観光ボランティアのウォーキングを通して確認しております。そしてそれらの業績から、時の聖武天皇より日本で初めて大僧正の位階を授けられ、更に東大寺大仏建立の責任者として招聘されたとのことであります。行基のスーパーマンぶりは、両親（父：高志才智（こしさいち）、母：蜂田首古爾比売（はちたおびとこじひめ）やまた先祖の影響も大きいと思われます。百済から帰化した賢者「王仁（わに）博士」を源流にしているからです。今日の日本風土の礎となる精神文化にも大きな影響を与えたのが朝鮮半島出身の人達だったとなりますと、日本は隣国韓国ともっと親密な関係を作らねば、と思うものであります。

今、家原寺は本殿と三重塔が塀を境に離れて配置されています。そのためもあるのでしょうか、参拝客は少なく、お寺のご本尊である文殊菩薩のご利益にすがろうとする若者達が春の受験シーズンにどっと訪れるだけのようです。堺市博物館で拝することのできる高徳の師、後世「菩薩」と称えられた行基、その生家の現在の姿が少々残念であります。しかし、行基の祖先が有していたという高い医薬の知識・技術が、今、堺市立総合医療センターで活用されているのかもしれません。

歴史探訪③ 石津川

［田辺 謙二］

「西区歴史探訪第 3 回は、堺の歴史にしばしば登場する「石津川」についてご紹介します。

市役所展望ロビーなどで百舌鳥古墳群のうちニサンザイ古墳や御廟山古墳やいたすけ古墳がいずれも東西方向に向いていることの理由について、「竹内街道を通行する人々同様、石津川を通って 都(飛鳥)と交流する船から見ると、古墳が最もビッグに見える配置になっています。」と紹介しますと、お客様は皆さん納得して下さいます。

その石津川、茅渟の海（大阪湾)の河口から東に 300 紅ほ ど上ったところで紀州街道と交叉します。ここに架けられた 橋(太陽橋)の袂には、今から七百年ほど前の南北朝時代に、 南朝方の北畠顕家(キタバタケ アキエ)が圧倒的な北朝方の高師直(コウノモロナオ)の軍勢と戦火を交えてあえなく討ち死にしたと、その顕彰碑が語っています。弱冠 21 歳の凛々しい美青年顕家の死に、今でも涙する女性がいると聞きます。夕刻、その太陽橋の上で海の方を見ますと、真っ赤な夕陽が海に落ちる姿を見ることができます。思わず手を合わせたくなる神々しさであり、橋の名前の謂れに「ああそうか」と納得致します。そして後ろを振り返れば、ゴトゴトと鉄橋を 渡るチン電があり、何とも下町の風景だなあと、安心感に浸 れます。

太陽橋から更に東南に向かうと石津川は清らかな水となって 18 世紀の末頃には神石から津久野にかけて晒し木綿の生産 が盛んに行われました。そして真っ白な晒しが消費地大阪に大量に送られたとのことです。しかし明治の後年より、石津川は次第に汚れて、晒しの生産地は毛穴(け)などの上流地域に移っていきました。更に汚れが深刻化してくると川の水ではなく工業用水を使用して仕上げるようになりました。ただ河川のクリーン化は技術の進歩によって確実に進んでおり、秋の季節、遡上したボラなど の海の魚が盛んに川面を跳ねている姿を目にすることができます。

古くは神功皇后が新羅から凱旋した時に石津川に入ったり、その沿岸に住んだことがあるとの伝承、また孝徳天皇が石津川に来られた時、所持していた鏡をこの川に落としたので益鏡川とも呼ばれたとのこと、更に古墳時代に石材が各地から集められてこの地で石棺造りが行われたという伝承は、ニサンザイ古墳などの向きの理由の正当性と相まって、私達に古代のロマンを語り続けているようです。

歴史探訪④ 日部神社

［谷川 正知］

草部にある日部(ｸｻﾍﾞ)神社をご案内します。神様と同じ文字を用いたのでは畏れ多いと地域名は草部になっていると伝わっています。その日部神社には重要文化財が２つもあります。田舎にはめずらしい四脚門をくぐると、広い庭になって少し大きな狛犬が迎えてくれます。鳥居や狛犬がいくつもあるのは、明治44年に４ヶ村の神社が合祀されたためでしょうか。正面に大きくて立派な拝殿が唐門のようにどっしりと建っています。見上げると鬼瓦には龍が、その下には鶴が飛んでいる姿が見事に彫られています。

草部神社　拝殿

本殿横の石灯篭

宮司さんにお願いして塀に囲まれた本殿も見せていただきました。荘厳な３間四方の本殿に階段と庇がついた見事なお社です。そして両脇に細長いスマートな石灯籠が立っていますが、この右側の石灯籠が重要文化財なのです。灯籠の基台の側面には花弁と走獣を四方に浮き彫りにし、竿の正面には宝珠を追う雲龍が彫られ、上部の四角の火袋の角には四天王像が彫られています。そして竿の側面には正平24年（1369年）の銘と楠木正儀（ｸｽﾉｷ ﾏｻﾉﾘ）の寄進によるものと書かれています。本殿上を見上げると大きな三つの蟇股（ｶｴﾙﾏﾀ）があり、左の蟇股にはオシドリがくっきりと彫られていますが、右の蟇股には鳩と松、そして中央には２人の老人が碁盤を挟んで碁に興じています。動物や虫、植物が彫られているのはよく見られますが、こうして碁を打っている蟇股というのは非常に珍しく貴重なものです。この本殿も室町時代初期の建築物として重要文化財に指定されていますが、彫刻は以前は鮮やかに彩色されていましたが今は色落ちして灰色になっています。宮司さんは「修理したいがなかなか予算がつかない」と嘆いておられました。なんとか綺麗にして後世に伝えたいものです。

もう一つ意外なことを発見しました。太古この付近は石津川の入江になっており、神武天皇が大坂に初めて上陸したのはこのあたりだったという言い伝えがあります。立派な石碑があるというので行ってみました。神社から東に300mほど下りて念法寺の横を通り裏へ回ってみると、畑の横に高さ3m位の石碑が立っており、そこには「神武天皇御東征日下津□跡」と刻印されていたのです。驚きでした。日部神社へのアクセスは、南海バス「光明池駅行」石橋で下車して東へ５分です。また、事前に予約すれば本殿拝観も可能です。

歴史探訪⑤ 浜寺公園

［田辺 謙二］

惜松碑

西区歴史探訪第 5 回は、皆さんが一度は訪れたでしょう「浜寺公園」をご案内します。

浜寺公園は、「日本の名松 100 選」に選ばれた、約 5 千本のクロマツが茂る広大な緑の公園です。4 月には、大勢の堺市民が薄紅色の桜花の下でお弁当を広げ、5 月には、ばら庭園を中心に「ローズカーニバル」があり、夏はプール、秋は交通遊園の紅葉など、多くの人々に親しまれています。

ここは、古の歌人置始東人（ｵｷｿﾞﾒﾉ ｱｽﾞﾏﾋﾄ）という万葉びとが、白砂青松の景勝地を絶賛した歌を残しており、また百人一首にも一宮紀伊（ｲﾁﾐﾔﾉｷｲ）があの有名な歌「音にきく 高師の浜のあだ波 は かけじや袖の濡れもこそすれ」と謳っています。また南北朝時代には、この海岸に三光国師（ｻﾝｺｳｺｸｼ）が広大な寺院大雄寺を建立し、別名を高師の浜寺と呼ばれていたのが、いつしか「浜寺」と略して呼ばれ地名も浜寺となったと伝わっています。

そして明治の元勲大久保利通がたまたまこの地を訪れた時、明治維新で禄を失い路頭に迷っていた士族の救済のために沢山の松が民間に払い下げられ、伐採の憂き目にあっていたのを目にしました。

大久保は「おとに聞く高師の浜の松が枝も 世のあだ波はのがれざりけり」と大いに嘆き、それらの保護を堺県令に忠告したところ、直ちに伐採は中止され、さらにその翌年には太政官布告によって日本で最初の公園に指定されました。大久保の歌を刻んだ「惜松碑」は、公園の中央入口近くで数多 くの松の木に囲まれながらひっそりと佇んでいます。当時の県令は税所篤（ｻｲｼｮ ｱﾂｼ）でしたが、仁徳天皇陵古墳の前方部の東南箇所が地崩れを起こし石棺が現出した明治 5 年に、彼はそれらの記録保存に注力したとも、財宝探しに血眼になったとも聞きます。

浜寺公園の松はその後も何度か災難に遭っています。太平洋戦争直後、米軍がこの地を宿舎にするため千七百本もの松を伐採しました。また、公害防止技術が未発達の頃、公園東面に沿っていた国道は産業道路と化して多くの自動車が走り、西側も新興の泉北コンビナートとして多量の排ガスを排出していたからです。

そんな過酷な時代を経て、今は環境とも均衡した平穏な公園になっています。あの与謝野晶子が鉄幹との逢瀬を楽しんだのも浜寺公園内の「寿命館」という料亭でしたし、更に時代が下って日本水泳界に多くの人材を輩出したのは（今も輩出している）浜寺水連学校です。何にもまして季節ごとのお花見、桜やバラの鑑賞会に毎年多くの家族連 れで賑わうのは市民に憩いの場を提供している証拠です。南海本線の浜寺公園駅周辺が線路高架化工事中ですが、あの東京駅の設計者でもある辰野金吾設計の浜寺公園駅舎はそのまま残されるとのこと。また、チン電が浜寺駅前駅を始発駅にしているように、数々の歴史と文化をこれからも発信し続ける堺人の心意気を内外に示していきたいものです。

歴史探訪⑥大鳥大社

［谷川正知］

西区歴史探訪第6回は、皆さんよくご存じの大鳥大社をご案内します。大鳥大社は太平洋戦争の戦火にあわず、今も1万5千余坪の境内を有して、和泉の一の宮として皇室の防災雨祈の祈願所となっています。

祭神は日本武尊（ﾔﾏﾄﾀｹﾙﾉﾐｺﾄ：景行天皇の第二皇子）で武勇に優れていたことから各地の反乱軍征討を命ぜられ、幾多の困難な戦いを勝ちぬきましたが、大和へ帰る途中、伊勢の能褒野（ﾉﾎﾞﾉ）において病のため亡くなったため、その御霊が白鳥となり大和、河内を経て最後に辿り着いたのがこの地。この場所が一夜にして幾種もの木々が生い茂ったため千種の森（ﾁｸﾞｻﾉﾓﾘ）と呼ばれるようになったそうです。もう一人の御祭神の大鳥連祖神（ｵｵﾄﾘﾑﾗｼﾞﾉﾐｵﾔﾉｶﾐ）はこの地方の豪族と言われています。

また、明治初期の廃仏毀釈運動までは、行基が建立した「勧学院神鳳寺」が在り、多くの信者で賑わっていたようです。神社はＪＲ鳳駅から北へ10 分ほど歩いた所にありますが、大きな鳥居が目印です。その鳥居を潜り石畳の参道の両側の木々の間を通る時には、車の音も途絶え空気が変わるせいか神聖な気持ちになります。更に右に左に折れながら進みますと、「祓所」、「日本武尊像」、「神馬像」があり「手水舎」の先に「拝殿」と「本殿」があります。本殿は出雲大社の大社造りに次ぐ古い様式で、大鳥造と呼ばれている切妻造妻入社殿の古い形式のものだそうです。

この大鳥造社殿手前の広場には与謝野晶子の「和泉なるわがうぶすなの大鳥の宮居の杉の青きひとむら」の歌碑があります。

また少し東側には平清盛が熊野詣を終え源義朝との決戦を前に、我が身と蚕をかけて戦勝祈願をした時の歌:「かいこぞよかえりはてなば飛びかけりはぐくみたてよ大鳥の神」が富岡鉄斎（明治10～13年に宮司）の筆によって歌碑として残されています。また、織田信長も豊臣秀吉も徳川家康も社領の寄進、社殿の造営等に奉仕したとの記録が残されています。毎年、正月の3ヶ日には参道の両側に屋台がぎっしりと並び、初詣の参拝客は本殿に辿り着くまでに1時間も掛るそうです。4月には平安時代の衣装をまとった子どもたちによる花摘祭が見ものですし、6月は菖蒲祭、10月の秋祭りにはだんじりが11台も繰り出して勇壮な姿を見せてくれます。

また防災、家内安全、交通安全、学業成就等々の祈願を兼ねて毎月2の付く日「にい日」には、日用品を買い求める近在の人達で大いに賑わう庶民の社（ﾔｼﾛ）になります。

歴史探訪⑦ 二つの街道

［田辺 謙二］

西区歴史探訪第７回は、西区を南北に走っている２本の街道を紹介させて頂きます。

１本は海側を摂津大坂の高麗橋を起点に紀州和歌山城まで至っている紀州街道であり、もう１本は同じく摂津大坂の渡辺津（現天満橋付近）を起点に紀伊田辺に至る山沿いの熊野街道です。いずれも往時には、人や物の往来また熊野詣の時の主要な幹線道として利用されたものです。ほぼ並行している二つの街道はやがて泉佐野市上瓦屋（ｶﾐｶﾜﾗﾔ）で合流することになります。

堺市はこの二つの街道沿いに標柱石を立てています。西区内に限定してその標柱石の数をあたると、「紀州街道」には７本、「熊野街道」には６本あることが分りました。

紀州街道には、大坂夏の陣の際に上田宗固率いる紀州浅野勢（徳川方）と、塙団右衛門（ﾊﾅﾜﾀﾞﾝｴﾓﾝ）を先鋒とする豊臣方が交戦した樫井（泉佐野市）の戦場があります。塙はあえなくその地で戦死したのですが、墓碑（五輪塔）は今も400年前の豪傑達の激戦を讃えているように見えます。また紀州街道は、紀州徳川家のお殿様が参勤交代で通った街道であり「鞠と殿様」の童謡を懐かしく思い出します。

てんてんてんまり　　てん手まり　　てんてん手まりの
手がそれて　　どこからどこまで　　とんでった　・・・
表の行列　　なんじゃいな　　紀州の殿様お国入り
きんもんさき箱　　ともぞろい　・・・

西区内に紀州街道の旧跡を探しますと、「西区歴史探訪その3－石津川－」でも紹介した「太陽橋」があります。沈む夕陽の絶景地であり、南北朝時代に南朝方の将軍北畠顕家（ｷﾀﾊﾞﾀｹ ｱｷｲｴ）が北朝方と戦火を交えて討ち死にした顕彰碑が街道の傍らに建っています。

他方、熊野街道は西区内では取り立てて旧跡として紹介する所もないようです。しかし、大鳥大社の北を東に向かう常浜線（ﾄｷﾊﾏｾﾝ）との交差点の頭上には「鳳小栗街道」の交通標識が掲げられています。そうです、熊野街道は別名小栗街道とも言い、中世・古代の小栗判官の伝説が残っていました。‥中世、鞍馬寺の毘沙門天の一申し子である小栗判官は、武蔵国相模の郡代の娘、照手姫（ﾃﾙﾃﾋﾒ）と結婚しますが毒殺されます。閻魔（ｴﾝﾏ）大王の計らいで甦りましたが、頗（ﾗｲ）病におかされ、時宗総本山・清浄光寺から土車に乗せられ、万病に霊験あらかたな熊野を目指しました。途中、岐阜で照手姫と再会しましたが、小栗だと気がつかない照手姫は、善意から土車を引きはじめます。説経節（ｾｯｷｮｳﾌﾞｼ）の名調子です。

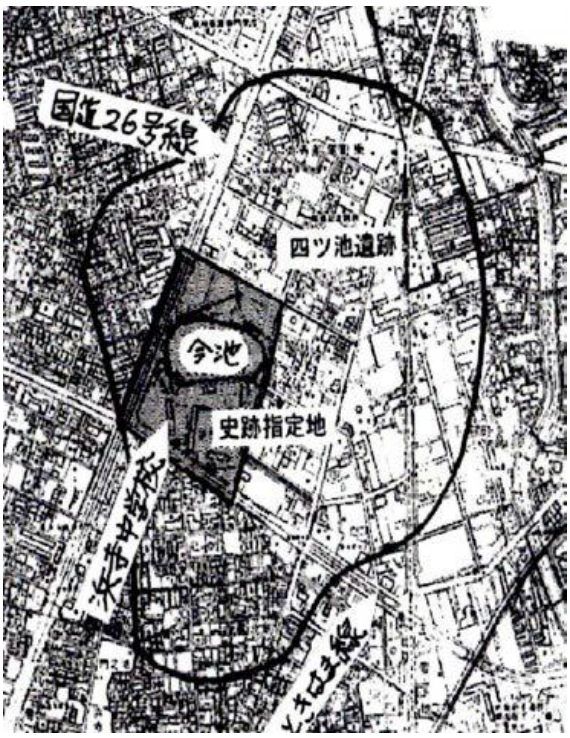
「一引き引いては千僧供養、夫（ﾂﾏ）の小栗の御ためなり、 二引き引いては万僧供養～」と謳いながら、照手姫は土車を引き、大津まで運んだところで、異形の男が小栗だとは気づかぬままに引き返してしまいます。しかし、小栗は大坂四天王寺を経由して紀州熊野に至ったとのこと‥。

そんなもの悲しい説経節が残っている熊野街道ですが、しかし、熊野詣には平安時代中期頃から上皇や公家が、後には武士や民衆なども参加するようになったとのことであります。

歴史探訪⑧ 幻の遺跡 四ツ池（上）

［谷川 正知］

今、堺市は仁徳天皇陵古墳を中心とする百舌鳥古墳群が、世界文化遺産登録の国内推薦されたことで脚光を浴びています。西区には、その古墳時代に遡る弥生時代の人々の生活や社会の様子がわかる貴重な遺跡があります。それが今回紹介する四ツ池遺跡です。四ツ池遺跡について、（上）（下）紹介致します。



史跡指定地と四ツ池遺跡跡の範囲

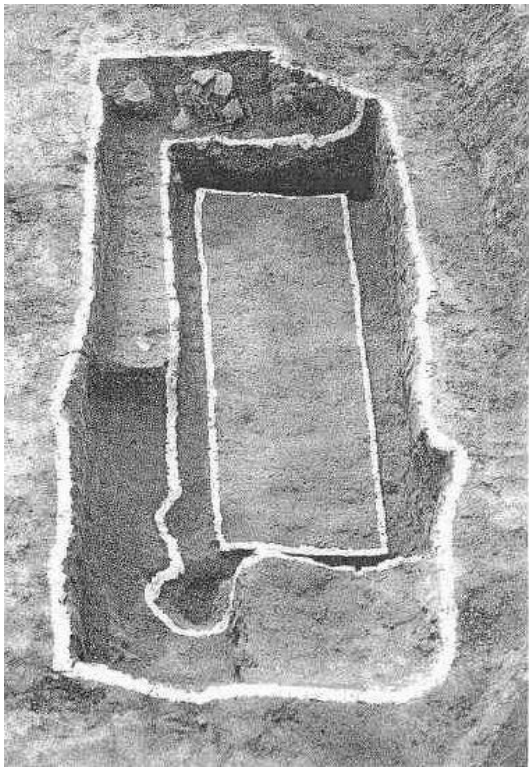
四ツ池遺跡（中心は堺市立浜寺中学校隣の今池があるところ）は、洪積段丘（福泉中学、大鳥大社、浜寺中学へと北西に伸びている）の先端部分、三光台地の7～11mの高台に、周りを川や低湿地に囲まれ、とても見晴らしの良い場所でした。遺跡は東西 800m、南北1km の広さがあります。その中からたくさんの遺構、遺物が発掘されています。出土品としては木製品（鋤、鍬、弓、容器）、土器（かね、壺、高杯、水差し、たこつぼ）、石器（石包丁、矢じり石斧）、他に鹿や猪の骨、魚の骨や貝殻、うりや桃の種、どんぐり等が大量に出土されています。これらのことから、多くの労力を必要とする米造りを中心に、農閑期には漁や狩りをし、木の実を集めたり、また少しは野菜を作っていたようです。さらに特徴的なことは、たこつぼ（特に飯蛸壺）が3千個以上出土し、ここの人達が飯蛸を盛んに食べていたことが分ります(特に冬場のメスの卵が一杯つまった飯蛸はとても美 史跡指定地と四ツ池遺跡跡の範囲味だそうです)。遺構としては、直径5mほどの（中心に炉がある）竪穴式住居跡が重なって発見されています。また、それより大きな住居跡、高床式倉庫跡や棺を持たない土壙墓（ﾄﾞｺｳﾊｶ)、木棺墓、大小の方形周溝墓（周りに溝のある方形の墓、一辺が10m 前後のものと20m を越える大規模のものまである）や大溝、小溝などが発掘されています。尚、西区役所の入口にはシンボルマークとして2 つの大きな石包丁が立っています。

ま蛸壺と飯蛸壺（小：約9cm）

歴史探訪⑨ 幻の遺跡四ツ池(下)

［谷川正知］

ここには縄文時代後期から続く連続した集落があることから、弥生時代前期において和泉地方では最も古い集落だったようです。家は地面を少し掘り下げ、直径5㍍位の円形の中心に炉があり、暖房や明かり、そして炊事に食事、眠るのもここで行われたと思われます。お墓（みな同じくらいの大きさ）は家の近くに穴を掘って作り、死者を埋葬していたようです。これらのことから、リーダーはいても皆同じような暮らしをしていたようです。そして少し時が経過した頃には、1㎞以内に3つの集落が生まれています。弥生時代中期になると、周りの小さな村は消え、四ツ池の集落に家が100棟（住人は300人程か）も立ち巨大化していきます。そして台地の南側には大きな溝を掘り、東は川、北・西は低湿地や崖に囲まれた砦のような集落になっていきます。更に住居に大小が生じ、溝で囲んだ方形の区画の中に大きな建物・神殿または首長クラスの特別の住居が生まれます。また特異なのは居住域とは別に墓域が形成され（5箇所）、しかも方形周溝墓が出現して10㍍ほどの小さな群と20㍍を越える規模の大きな群とがあり、副葬品にも数の違いが生じています。



第45地区中央部南調査区から見つかった弥生時代前期の土壙墓

これらのことから、大きな自然災害が起きたか大きな争乱が起きて、台地上の四ツ池に人々が集まってきたと考えられます。また住居や墓地に大小ができたことから、住民の間に階層差が生まれてきたことがわかります。後期に入ると大溝が埋められ、代わりに小溝が掘られ、台地上の集落は小さくなり、方形周溝墓での造墓も停止します。その代わり周囲に四つの集落ができ、これらのことから争いがなくなり、平地の田に近い所にそれぞれ親しい人々が新しい村を作っていったのではないかと考えられます。まだわからないことが沢山ありますが、四ツ池遺跡は弥生の全期間に亘って集落が営まれた貴重な遺跡です。昭和42年、国道26号線の道路敷設計画が発表されると大きな保存運動が起りました。しかし、浜寺中学校が建てられ国道26号線やときはま線が開通し、宅地開発が進んだ今、遺跡があったことが分かるのはフェンスに架けられた説明文と一つの碑のみです。皆さんが浜寺中学校の辺りを通った時は、2千年以上前からこの台地に人々が住み、お米作りや漁や狩りをしながら生活していたことに思いを馳せて下さい。尚、出土品は倉庫に保管され、博物館でも見ることはできませんが、浜寺中学校の玄関に一部展示されています。学校にお願いすれば見せていただけます。

歴史探訪⑩往古、戎（ｴﾋﾞｽ）神が降臨した石津神社

【田辺 謙二】

石津川と国道 26 号線が交差する堺区石津町に鎮座している石津神社は、樹齢千年の大樟（ｵｵｸﾞｽ）がお社と鳥居を守っているように見えます。西区歴史探訪で堺区にある寺社を取り上げるのは、この地が行政上は堺区になっているものの、石津川を挟んで直ぐの船尾町や国道の西側の浜寺石津町は西区であったりするなど、西区／堺区が混在している土地だからです。

由緒書に「日本最古の戎の宮」として謳っているように、八重事代主神（ﾔｴｺﾄｼﾛﾇｼﾉｶﾐ＝戎さま）が五色の石を携えて此の地に降臨したことから「石津」と名付けられたと古文書にはあるそうです。また、第 11 代垂仁天皇の時に出雲の国の野見宿祢（ﾉﾐﾉｽｸﾈ）が当麻蹶速（ﾀｲﾏﾉｹﾊﾔ）と力競べで功を為して領地を賜り、後に石津神社の神官になったそうです。この野見宿祢は「相撲」の祖とも言われて、末社として当神社に祀られていますが、天皇が崩御した時に殉死をしていた慣わしを「埴輪」に変えることを献言したことでも有名です。土師器（ﾊｼﾞｷ）生産地として知られる泉北地域が南に位置していたこととも関わりがあるのでしょうか。

土師部（ﾊｼﾞﾍﾞ）であった野見宿祢の末裔は後に菅原姓に改名します。神社の末社の一つとして天満宮が祀られているのは、菅原道真が九州大宰府天満宮に左遷の旅に出る時に当神社に参詣し、そして堺の港から瀬戸内海を船で渡って行ったことによります。

石津神社からほぼ真西 1km ほどに石津太（ｲﾜｯﾀ）神社があります。毎年 12 月 14 日には泉州の奇祭と呼ばれている「ﾔｯｻｲ・ﾎｯｻｲ祭り」が行われている神社ですが、どちらも戎さまを御祭神にしていることから繋がりがあるのでしょうが、定かではありません。恐らく村が大きくなっていく過程で新たに神様をお祀りする場所が必要になった、ということかと思います。そして時を経て江戸時代以降、堺の村々では秋の稔を祝って秋祭りが盛んに行われます。堺百町の町筋にはだんじりや布団太鼓の景気のいいお囃子が聞こえ、若者達の疾駆する姿が見えますが、ここ石津神社には両方の神輿が２台ずつ（更に子供だんじりも 2 台）宮入りします。その勇壮華麗な姿には時が経つのも忘れるほど見入ってしまいます。今、神社の境内には与謝野晶子の歌碑が建ち、訪れる人たちに明治・大正のロマンを感じさせると同時に、お社の悠久の佇まいに氏神としての威厳を感じさせていただきます。

宮司さんによれば、神社の由緒は代々口伝によって伝承され、古文書が残っているケースは少ないそうですが、寛保二年（1742 年）に著された古文書「石津大社畧記（ﾘｬｸｷ）」が巻物として残っているとのこと、興味がおありの方は宮司さんにお願いすれば見せていただけるかも・・。

歴史探訪⑪ 義経が坐した石の残る踞尾神社

【田辺 謙二】

西区津久野は、和晒し生産に必要な清水を湛えた石津川がゆったりと西を流れる地域です。そして、その中央には踞尾（ﾂｸｵ）八幡神社が鎮座しています。神社はやや高台に位置しており、東には津久野小学校があるなど地域の氏神様であります。参道から二十六段の階段を上がり鳥居を括ると真正面に拝殿が現れます。

創建は大古、「天照皇大神（ｱﾏﾃﾗｽｺｳﾀﾞｲｼﾞﾝ）と宇迦御魂神（ｳｶﾉﾐﾀﾏﾉｶﾐ）の二神この地に祀る」との神祠に基づいて、文徳天皇の代（850～858 年）に初めて社殿を建て誉田別命（ﾎﾝﾀﾞﾜｹﾉﾐｺﾄ＝第十五代應神天皇）を主祭神として祀ったとのこと。更に由緒書によれば、神功皇后が三韓出兵の帰路この神域に駐輦（ﾁｭｳﾚﾝ）したこと、また源義経が八嶋（屋島）に向かっていた時に暴風にあいこの地に避難したのですが、武運長久を武蔵坊弁慶とともに祈願したこと、さらにその際に坐した石が「義経腰かけ石」として注連縄（ｼﾒﾅﾜ）を廻らせて残っています。津久野の地にある踞尾神社ですが、昭和 35 年（1960 年）、団地などができ周辺の人口が急増したため JR 阪和線の新駅が作られることとなり、踞尾では読みにくいということから「津久野」が駅名となりました。この影響で、地名も津久野という名が一般化して今や「踞尾」の元の地名が残るのはこのお社だけとも言われています。

それにしましても、樹齢八百五十年の大楠と七百年の大楠の木は本殿の右・左に雄々しく聳え立っており、そのご神木に縋るかのように近くにあります津久野地域会館から、少年少女たちの「エィ！」、「オウ！」という武道に励む元気な声が毎日のように聞こえてきます。10 月 5 日の秋季例祭では山車（ﾀﾞﾝｼﾞﾘ）の宮入が行われますが、参道は今年もきっと賑わうことでしょう。

歴史探訪⑫ 浜寺界隈

【田辺謙二】

西区歴史探訪ではこれまでに浜寺公園や浜寺公園駅などを紹介してきました。今回は、それらより東側にあります浜寺昭和町や大鳥北浜神社などをご案内します。

浜寺昭和町は太平洋戦争直後に米軍軍人の住居が多く建てられた一等地であり、今でも広い敷地内に瀟洒な洋館を持つ家がいくつかあります。戦前から高級リザート地であった高師浜（ﾀｶｼﾉﾊﾏ）や浜寺公園が西側に控えていたことでこの地が選ばれたのでしょう。帝塚山と並ぶ大阪の高級住宅地として名を馳せていましたが、近年になり富裕な日本人、著名な文化人が多く住まいしているようです「白い巨塔」、「大地の子」などの小説の作者である故山崎豊子が執筆活動をしていた邸宅もあり、また政治家や実業家の家も多くこの界隈にあります。碁盤の目状に綺麗に区画された道を歩きますと、何とも言えず裕福感に浸ることができるのは、培われた歴史のお蔭ということでしょうか。

浜寺昭和町から東の方向、浜寺元町の住宅街の中に大鳥北浜神社があります。創祀年代は不確かですが、飛鳥時代末期の慶雲 3 年（706 年）に社殿が造営されたといわれております。和泉の国の一宮：大鳥大社から北西に約 1 キロほどの地にあり、大鳥大社の「大鳥」を冠した境外摂社五社の一つで、かつては「大鳥神社鍬靫（ｸﾜﾕｷ）」と呼ばれていたようです。略して鍬靫社と呼ばれていたのですが、明治 6 年に大鳥北浜神社と改称されたとのこと、名前から推察するに以前は鍬（ｸﾜ）・靫（ﾕｷ：矢を入れて背負う武具）を祭祀にあたって使用し、農耕や武事に関する事件に対して祈りを捧げたことに起因する名前だったと思われます。神社は住宅地の中に鎮座し叢林はこんもりと高いのですが、現在は大鳥大社が併せて管理しているようです。そして信仰心の篤い近隣のお年寄りが雑草刈りをしている姿が時々見受けられます。

毎春、大鳥大社で開かれる「花摘祭」では稚児行列が行われますが、その後のパレードでは大鳥北浜神社まで歩を進めるとのこと、大社との深い繋がりが今でも続いております。

洋館と延喜式社が混然と近接している町ですが、少しも違和感なく感じられる穏やかな町であります。